

平成19年度遺伝子組換え作物等に関する意識調査委託事業のうち

バイテクコミュニケーション基盤事業

実施報告書

平成20年3月

(社)農林水産先端技術産業振興センター

はじめに

本事業は、平成19年度の農林水産省委託事業として、社団法人農林水産先端技術産業振興センター（略称：STAFF）が受託し、実施したものです。

本事業の趣旨は、「今後の遺伝子組換え作物等の研究開発の推進に資するため、国民との双方向コミュニケーション活動に関して、有識者の助言を得る会議を運営するとともに、継続的なホームページやメールマガジンによる情報提供及びこれらを通じた意見・要望の収集、これらに必要な内外の情報の収集・整理等を行うもの」とされております。

具体的には、まず、遺伝子組換え技術を中心としたバイオテクノロジーに関する国民との双方向コミュニケーションの進め方に関し、有識者の助言を得るための「バイテクコミュニケーション企画会議」（公開）を開催し、各方面からの意見・提言等を整理し、公表しました。

また、専門家から成る「編集会議」を設置し、委員からの指導、助言を頂き、ホームページ「バイテクコミュニケーションハウス」において遺伝子組換え技術に関する新着情報やQ&A、国内外の新たな情勢等に関する情報を提供するとともに、バイオテクノロジーに関する新たな情報を盛り込んだメールマガジン「バイテクメールニュース」を定期的に発行しました。

さらに、「編集会議」委員からの協力を頂いて、最新の関連情報を収集・整理し、昨年まで発行してきたパンフレット「遺伝子組換え農作物入門プログラム」及び「遺伝子組換え農作物を知るためにステップアップ編」、並びに「バイテク小事典」の内容を改訂・増補して、関係者に広く配布しました。

本報告書は、平成19年度におけるこれらの活動の実績をとりまとめるとともに、整理、分析・考察を加えたものです。この報告書及び一連の事業成果が、今後のわが国における遺伝子組換え作物等の研究開発の戦略的な取組と国民的理解の促進に寄与することを、切に期待するところであります。

最後になりましたが、本事業の実施に当たり、ご助言・ご指導を賜りました「バイテクコミュニケーション企画会議」及び「編集会議」の委員の皆様方をはじめ、ご支援・ご協力をいただいた関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成20年度3月

社団法人 農林水産先端技術産業振興センター（STAFF）
理事長 岩元睦夫

目 次

事業概要	1
バイテクコミュニケーション企画会議の開催	2
バイテクコミュニケーション編集会議の開催	1 6
ホームページ「バイテクコミュニケーションハウス」の提供	2 1
メールマガジン「バイテクハウス Mail News」の発行	2 4
内外情報の収集・整理と遺伝子組換え技術等に関する パンフレットの改訂	2 5
まとめ	2 7
参考資料	2 9

事業概要

本事業は、平成19年度の農林水産省委託事業として、社団法人農林水産先端技術産業振興センター（略称：STAFF）が受託し、実施した。

本事業の趣旨は、「今後の遺伝子組換え作物等の研究開発の推進に資するため、国民との双方向コミュニケーション活動に関して、有識者の助言を得る会議を運営するとともに、継続的なホームページやメールマガジンによる情報提供及びこれらを通じた意見・要望の収集、これらに必要な内外の情報の収集・整理等を行うもの」とされている。

今年度は、「バイテクコミュニケーション企画会議」を3回、「編集会議」を3回開催するとともに、ホームページ「バイテクコミュニケーションハウス」を運用し、「バイテクメールニュース」を定期的に発行した。

また、最新の関連情報を収集・整理し、昨年まで発行してきたパンフレット「遺伝子組換え農作物入門プログラム」及び「遺伝子組換え農作物を知るために ステップアップ編」、並びに「バイテク小事典」の内容を改訂・増補した。

バイオテクノロジーコミュニケーション企画会議の開催

有識者等の委員で構成する「バイオテクノロジーコミュニケーション企画会議」を開催し、委員からの助言等を得ながら、遺伝子組換え技術を中心としたバイオテクノロジーに関する国民との双方向コミュニケーションの推進を図ることとし、当センターは開催事務局として企画会議の運営を担当した。

1. バイオテクノロジーコミュニケーション企画会議の設置

(第1回企画会議資料「バイオテクノロジーコミュニケーション企画会議の開催について」より)

1) 趣旨

農林水産技術会議が策定した「農林水産研究基本計画」では、農林水産研究を進めるに当たり、科学技術と社会との関わりを十分に踏まえ、国民との双方向コミュニケーションの確保等を通じて国民に対する説明責任を十分に果たすことが必要であるとしている。特に遺伝子組換え技術等の急速に発展する先端技術については、大きな可能性を秘めた技術である一方、わかりやすく説明することが難しい分野であり、かつ、国民の関心も高いことから、双方向コミュニケーションの取組を強化する必要がある。

このため、有識者等の委員で構成する「バイオテクノロジーコミュニケーション企画会議」(以下「企画会議」という。)を開催し、委員からの助言等を得ながら遺伝子組換え技術を中心としたバイオテクノロジーに関する国民との双方向コミュニケーションの推進を図る。

2) 検討事項

遺伝子組換え農作物等の研究開発に関する状況とコミュニケーションの進め方について

3) 構成

- (1) 企画会議は別紙に掲げる委員をもって構成する。
- (2) 企画会議に座長を置き、座長は委員の互選をもって選任する。座長は、座長代理を指名する。

4) 運営

- (1) 企画会議は原則公開とする。
- (2) 企画会議の庶務は、社団法人農林水産先端技術産業振興センターが行う。

5) スケジュール

年間3回程度開催する。

6) バイテクコミュニケーション企画会議委員(五十音順、敬称略)

伊藤 潤子	生活協同組合コープこうべ参与
加藤 順子	(株)三菱化学安全科学研究所リスク評価研究センター長
金子 友紀	(株)食品科学広報センター
鎌田 博	筑波大学大学院生命環境科学研究科教授、筑波大学遺伝子 実験センター長(座長代理)
神田 敏子	全国消費者団体連絡会事務局長
小池 一平	全国農業協同組合連合会営農総合対策部
鈴木 昭憲	日本農学会会長(座長)
高柳 雄一	多摩六都科学館館長
平川 秀幸	大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授
松井 和彦	(財)バイオインダストリー協会産業と社会部会幹事
松永 和紀	科学ライター
三保谷 智子	女子栄養大学『栄養と料理』編集委員

2. バイテクコミュニケーション企画会議の開催

1) 第1回バイテクコミュニケーション企画会議の開催

(1) 日 時：平成19年8月28日(火)14:00~16:00

(2) 場 所：虎ノ門パストラル

(3) 参加者：バイテクコミュニケーション企画会議 委員11名

事務局等：農林水産省 農林水産技術会議事務局 横田技術安全課長 他2名、

(社)農林水産先端技術産業振興センター 岩元理事長 他5名

(4) 内容：

あいさつ：農林水産省農林水産技術会議技術安全課長

社団法人農林水産先端技術産業振興センター理事長

座長選出：

議 事：

バイテクコミュニケーション企画会議の開催について

平成18年度のバイテクコミュニケーションの進め方について

遺伝子組換え作物等に関する意識調査の進め方について

バイオテクに関するコミュニケーション活動の情報について
その他

(5) 配付資料：

バイオテクコミュニケーション企画会議の開催について(案)
平成19年度のバイオテクコミュニケーションの進め方(案)
「遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会」の
中間取りまとめの概要
遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方(中間とりまとめ)
「遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会」中
間取りまとめ
コミュニケーション会合におけるプレゼンテーション資料(案)
遺伝子組換え用語集(50音順)
遺伝子組換えの安全性をめぐる主な議論

(6) 議事概要

- ・ 座長として鈴木委員を、座長代理として鎌田委員を選出。
- ・ 横田課長より配付資料に沿って、「遺伝子組換え農作物等の研究開発に関する検討会」の中間とりまとめ、「平成19年度バイオテクコミュニケーションの進め方について」等について説明がなされた後、委員より、以下のような質問、意見等が出された。

〔議事1：「遺伝子組換え農作物の研究開発に関する検討会」の中間とりまとめについて、資料3, 4, 5を用いた説明に関連して〕

- ・ 農水省のバイオテクを進める姿勢に十分な意思統一がなされていないとの印象を持っている。特に組換え体論議になるとそれが現れる。つい先日もある研究現場のテレビ放映で、誤解を受けるような発言が報道された。農水省全体としての意思統一が必要ではないか。
- ・ 遺伝子組換えの考え方として大事なことは、バイオテクノロジー = GMOではないこと。農水省のGMOあるいはNonGMOいずれか一方しかないような言い方はおかしい。GMO、NonGMOともに農水省の作物の育種戦略の中に位置づけられるべきで、個別の作物ごとに十分論議する必要がある。最初からGMOありきではないと思う。「GMOは従来技術の延長線上に位置づけられる」という説明は、技術会議が落ち着いてGMOをみた結果との印象を受けた。
- ・ 中間とりまとめの中で、重点化の前提条件として「遺伝子組換え技術でなければ実現・達成できないもの」との考え方が示されたがどうも解りにくい。結局、何でも「この技術は、この技術でなければ

出来ないものである」という言い方が出来てしまうのではないか。

- ・ 本日のプレゼンを聞いて、「10年近く遺伝子組換えのコミュニケーションをやってきているのに、未だこんな段階か」という感想を持った。花粉症緩和米についても厚労省の機能性表示の壁に突き当たってしまった。このままでは、成果はアメリカに取られてしまうとの危機感がある。開発を早めるためには、公平性のあるメディアをもっと活用して理解を進めるべきである。
- ・ 検討会の中間とりまとめの中に、重点化の前提条件として政策上の必要性が挙げられていた。いろいろな研究開発の動きがあっても、日本の農政全般あるいは国際協力のグランドデザインを示した上で位置づけて見せないと、国民としてどう関わって良いかわからない。

〔議事2：平成19年度バイオテクノロジーコミュニケーションの進め方について、資料2,5,6,7を用いた説明に関連して〕

- ・ リスクアナリシスを基本に置きながらきちんと議論していく姿勢を聞いて安心した。花粉症緩和米の経過は、省庁間の連携もあるだろうが、基本的に国民の要望と理解の問題ではないのか。今回のコミュニケーションの方法については、大規模、小規模など色々組み合わせたリスクコミュニケーションの手法で、実験的な面もあるようなので興味深く見ていきたい。小規模は各種の団体とやるということか。
- ・ 企業的な観点から意見を言う。研究開発の段階から市場を意識して考え、各段階で見直しをするのが通常のやり方である。大規模コミュニケーションの場合には、GMOがどのようなものなのかを理解していない方々も含まれるので、いきなり栽培面積から説明を始めても解らないのではないか。従来育種とどう違うのかということから始めた方がよい。マスコミの影響力は大きい。マスコミもひとつのターゲットとしてコミュニケーションしたらどうか。
- ・ 日本の消費者は質が高く、反対運動もレベルが高い。ISAAAはGMOの推進団体である。説得材料としてISAAAの栽培面積データを最初に持ってくるのはいかなものか。反対運動の側から見ると、やむなくGMOが入ってきている状況でしかない。日本的、農水省的な別のまとめ方をした方がよい。いま通しているGMOは民間の開発によるものである。一方、日本は税金を使ってGMOを開発しているが、消費者、国民にどうフィードバック出来るのかも説明する必要がある。
- ・ GMOは食品としての安全性が理解されないと何も進まない。「やはりG

MOは不安で食べたくない」という相変わらずの状態になってしまう。交雑の問題も「食べたくないもの」だから問題にされる。マスコミできちんと報道されないとコミュニケーションの効果は出ない。地道にやっても、テレビですぐひっくり返されてしまう。

- ・「国民健康栄養調査」は毎年行われている。これに、GMO関係の調査を入れてもらったらどうか。マスメディアを活用することは重要。先頃の麻疹流行の際に、ワクチンのメディア発信はうまくいった。定期的にメディアとの勉強会をやっていたからと言われている。資料中に、遺伝子組換えの例としてカーネーションが出ていたが、食品ではないので誤解される可能性がある。
- ・安全性に係る消費者の関心に対しては、リスク評価の実際をテーマにしたコミュニケーションが必要かと思う。つまり、「安全性確保そのものをテーマにすること」、「食品安全委員会、消費・安全局との連携」などが考えられる。厚労省の担当官によれば、「日本の安全審査は非常に厳密にやっている。もっとアピールして良い。」とのこと。特に、アメリカよりしっかりやっていることは強調しているのではないか。説明資料については、レベル別・対象別に幾つか用意した方が良い。生産者向けには、安全性だけでなく利益が出るのか、アメリカに勝てるか等の点も重要である。また、特に初心者向けには、「実質同等性」はヨーロッパでもやっているように、別のわかりやすい表現に変えるべきである。
- ・対象に普通の主婦を想定しているならば、会合のタイトルはもっと分かりやすいものにすべき。今回のタイトルはバリアーが高い。もっと下げて、近づき易くした方がよい。テレビの世界と較べてみても、あまりにもかけ離れている。
- ・農水省としては、日本としてバイテクを農業の分野でどのようにやっていくつもりなのか、他省庁との関係も含めて知りたい。税金を使ってGMO開発をやるのは気になる問題である。「なぜ国がやらなければならないのか」、「やらなければならない状況はどうして生まれてくるのか」の説明が欲しいところである。
- ・一般の人々に対して、「実用化を目指した検討が進められていること」は新しい情報となるが、やはり「具体的な作物などのゴール」が示されないと実感がわかない。資料4の2番目「研究サイドからのわかりやすい情報発信の取り組み」に具体性が欲しい。例えば、研究者が情報発信活動し易い環境作りなどを支援してもらいたい。
- ・今回の大規模コミュニケーション会合は、首都圏の主婦や消費者を

対象にしたものとする。生産者向けには、まず、具体的な農産物や技術についての情報が必要であり、現段階では無理がある。

- ・ やっと農水省が本気を出してくれたかとわかって嬉しかった。資料6で気になるのは、都合の良いことしか出ていないのではないかという点である。色々あるマイナス情報にもきちんとして対応していることを示すべき。いま大規模コミュニケーション会合を国がやることには疑問がある。これによって感触をつかめるかもしれないが、いま力を入れるべきは、掘り下げた議論のできる小規模なものではないか。

2) 第2回バイテクコミュニケーション企画会議の開催

(1) 日 時：平成20年1月24日(木) 14:00～16:00

(2) 場 所：虎ノ門パストラル

(3) 参加者：バイテクコミュニケーション企画会議 委員 10名、
事務局等：農林水産省農林水産技術会議事務局 横田技術安全課長他3名、
(社)農林水産先端技術産業振興センター 岩元理事長 他5名

(4) 内 容：

あいさつ：農林水産省農林水産技術会議技術安全課長

議 事：

バイテクコミュニケーションの実施状況について

遺伝子組換え作物等に関する意識調査の実施状況について

その他

(5) 配付資料：

「遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会」の最終取りまとめの概要

「遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会」最終取りまとめ

「遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会」最終取りまとめ(本文)

平成19年度遺伝子組換えに関するコミュニケーション活動の概況について

「遺伝子組換え農作物に関する第2回コミュニケーション」配付予定資料

(参考)平成19年12月19日プレスリリース資料

(「遺伝子組換え農作物に関する第2回コミュニケーション」の開催及び参加者の募集について)

(6) 議事概要

- ・鈴木座長の司会のもとで会議が進められた。
- ・横田課長および担当官より議事次第に沿って配付資料を用い、「『遺伝子組換え農作物等の研究開発に関する検討会』の最終取りまとめ」、「平成19年度遺伝子組換えに関するコミュニケーション活動の概況について」等について説明がなされ、その後、委員より以下のような質問、意見、提言、助言等がなされた。

[議事1:「遺伝子組換え農作物等の研究開発に関する検討会」の最終取りまとめ]について、資料1, 2, 3, を用いた説明に関連して]

- ・検討会の報告について全体としては良くまとまっている。実用化した際の組換え農作物の混入防止措置についてはどう考えているのか？
- ・国として遺伝子組換え技術の研究開発を具体的にどうやるのかは見えるようになった。しかし実際に実用化するにはいろいろな問題があるので研究チームのようなものをつくって具体化を検討するのか？
- ・産学官のオールジャパンで実用化までやると言うが、体制作りが本当に出来るかが要。その辺はどうなっているのか？
- ・工程表を立案したのはよいことだ。工程表の各ステップで知的財産権の有無を確認し、開発戦略に反映させるようしっかり対応して欲しい。
- ・研究開発だけでなく、生産も視野に入れていく必要がある。国がリーダーシップを取るということだが、実際に生産となると、生産の現場を持つ地方自治体との関係が重要になる。地方が、遺伝子組換え技術の実用化に関して何をどのように考えているか知る必要がある。そのためには、農水省全体が一つになって自治体との関係を密にし、日本全体の整合性をはかっていく必要がある。
- ・感想として、工程表がその通り実現できるのか疑問。非常に厳しい気がする。資料2の1枚目を見て、重要点である安全性評価が抜けていると思う。どういう仕組み、考え方で進めていくのか？日進月歩のオミクス(-omics)の成果を取り入れた安全性評価についての基礎研究も行い、農水省として独自に検討したらよいと思う。安全性は別途考えるということだけでなく、一緒に出ていけば国への信頼性が増す。
- ・組換え作物の研究開発と安全性を両輪で進めているという印象付けのためにも、姿勢を示すことは重要と考える。

- ・ 実用化の研究開発として具体的になった。ならば実用化した暁には食料や、飼料の自給率がどうなるかなどの展望を示してもらいたい。それがないと研究開発する意義が分からない。また、機能性関係は花粉症米と同じように、ヘルスクレームの点で食品安全委員会や厚労省が関係してくるが、大丈夫か？
- ・ 食品の安全性のデータを消費者向けに積極的に出して、何が安全かの共通認識を持てるようにコミュニケーションすべきである。また、将来の日本の農業や食料をどうするのか、その中で遺伝子組換え農作物はどのような役割を果たすのか、農水省は、まずそこを示す必要がある。今の世界情勢では非組換えはだんだん輸入できなくなるという将来予想を示すべきだろう。
- ・ 資料3、2ページに国民理解の必要性とあるが、何のために研究開発をやるのか、これをやったら日本の農業がどうなるのか、やらなかったらどうなるのかなどを示すことが必要。
- ・ 日本国内だけ見ると、企業にはGMOはインタレストがない。なぜなら1品種開発するのに100億円かかるとも言われ、野菜などでは投資を回収できず、稲でも無理。もっと大きな大規模栽培に向けた技術である。しかし、海外に目を向ければ可能性は出て来る。輸入している60%の作物に関して、より良い品種を研究開発する意義はある。輸入品の品種、品質に関してはmade by Japanの国際展開の考え方が必要ではないか？
- ・ 海外も含めて国の科学技術政策にしっかり位置づけて欲しい。
- ・ 同感、同意見だ。紙・パルプ業界が先行している良い例である。

〔議事2：「平成19年度遺伝子組換えに関するコミュニケーション活動の概況について」、資料4を用いた説明に関連して〕

- ・ 生産者側の立場から話したい。GMOに関して少しずつ本当のことが分かって来ると、生産者は当然の対応で、単に不安がるのではなく本格的に考えるようになる。生産者にとっては、国が責任もって安全だと言ってくればよいことである。消費者は、昨今の不正や偽装が多い中で裏切られて不安になっているが、そのようにされれば受け入れる人は多いと思う。
- ・ 連携コミュニケーションの経験から報告する。GMOについて正しい情報提供をしてほしい農業高校において、自治体などとの関係で授業の中でGMOを取り上げにくく、GMOを推進していると問題視される現実があるようだ。

- ・ 科学技術としてのキッチンとした知識が伝えられない。伝えようとする先生にもストレスがかかっている。これは大きな問題であり、課題だ。
- ・ GMO に関する消費者の関心は食品安全性にある。検討会の報告の中では食品としての安全性の研究については触れられていない。どこが取り仕切ってどう進めていくのか、省庁連携してまとめていく必要がある。
- ・ その分野に関係するものとして科研費での研究があり、ウェブにも出ている。また、食品安全委員会が世界の食品安全関係の研究情報を集めている。
- ・ 検討会委員として、安全性に関して踏み込みが足りないと言われたが、今回は研究開発から実用化に至るまでの検討で精一杯だった。技術会議のフレームの中では、経営、共存ルール、食品安全性などには限界がある。省内、関係省庁合同が必要。
- ・ 生産面で経済的メリットが本当にあるのか確認して進めていく必要がある。経済的側面、社会的側面からの工程表が欲しい。生産者のメリットを、マクロ、ミクロ両面で評価して欲しい。
- ・ 教育の問題に関して、高校でも科学的な知識として遺伝子が出て来るのは「生物」である。普通高校ではマイナーな科目で、生徒の 1/4 が受ける程度だ。逆に、遺伝子組換えの心配や問題点などを伝える「社会」や「家庭」は必修というように制度的におかしな状態である。
- ・ 農業高校はそれなりのやり方はあるが、普通高校へどのようにアクセスするかは、学術会議の教育問題でもポイントになるだろう。
- ・ 資料の「安全性を巡る主な議論」に関して、科学的にはこんな出し方だろう。消費者の不安は、時を追って変わっている。不安とされている内容を振り返って分析してみたい。新しいコミュニケーション戦略が出て来るかもしれない。
- ・ 教育との関わりで、農水省が教育委員会と連携するのは無理かどうか考えて欲しい。現実を言うと、大学の文系では、GMO に興味ないと言うより拒否感がある。サイエンスカフェをやった経験から、理系でさえ、自分の専門外になると科学的思考が出来ない。思考の衰退がある。何とか学校教育へのアプローチを検討すべき。
- ・ 9 月の大規模コミュニケーション会合の会場から、“研究のための研究をやっているのではないか”、“10 年前と同じことを言っている”との批判があった。自動車など他産業は、世界を股に掛けた技術立国の戦略がある。農業・食品こそ、そのようなものになるべきだ。良い例がスイス。食品、GMO の世界的な戦略を持った企業も擁し、技術立国を

成し遂げてる。

- ・今日は、具体的な議論が出来た。工程表にあがっている課題をコミュニケーションの場を出して行って欲しい。5年間で200億円使う研究開発になるが、その結果がどうなるか大いに関心を持たれる。将来展望を示すと良い。

3) 第3回バイテクコミュニケーション企画会議の開催

(1) 日 時：平成20年3月11日(火) 14:00～16:00

(2) 場 所：虎ノ門パストラル

(3) 参加者：バイテクコミュニケーション企画会議 委員10名、
事務局等：農林水産省農林水産技術会議事務局技術安全課 田中課長補佐他1名、
(社)農林水産先端技術産業振興センター 岩元理事長 他5名

(4) 内 容：

あいさつ：農林水産省農林水産技術会議技術安全課 課長補佐
議 事：

平成19年度遺伝子組換えに関するコミュニケーション活動
について

コミュニケーションの実施状況について(大規模、小規模、連携)

ホームページ及びメールニュースについて

情報提供について

バイテクコミュニケーション企画会議について

意識調査結果について

その他

(5) 配付資料：

コミュニケーション関係資料

ホームページ関係資料

メールニュース関係資料

情報提供資料関係資料

バイテクコミュニケーション企画会議関係資料

遺伝子組換え農作物等に関する意識調査結果(調査モニター)

遺伝子組換え農作物等に関する意識調査結果(イベント参加者)

(参考資料)「遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会」最終とりまとめ

(6) 議事概要：

- ・ 田中課長補佐の開会の挨拶に続いて、鈴木座長の司会のもとで会議が進められた。
- ・ 議事次第に沿って、四方調査広報部長および田中課長補佐より、平成19年度遺伝子組換えに関するコミュニケーション活動について、配付資料を用いて「コミュニケーション（大規模、小規模、連携）の実施状況について」、「ホームページ及びメールニュースについて」、「情報提供について」、「バイテクコミュニケーション企画会議について」、「意識調査結果について」が順次説明され、その後、委員より以下のような質問、意見等が出された。

[議事1平成19年度遺伝子組換えに関するコミュニケーション活動についてに関連して]

- ・ 小規模コミュニケーションに参加した。遺伝子組換え作物の試験に畑を提供する意思がある生産者もいたが、現状では周りから反対の圧力がかかり難しくなる。前向きな生産者を支援する取り組みが必要である。
- ・ 意識調査では40%が遺伝子組換え作物の栽培を可とし、どちらでもないというのが40%で、遺伝子組換えが孤立しているわけではないという結果になっている。これをどう見るか。
- ・ 大規模コミュニケーション会合でも、参加者の中から、国内で遺伝子組換え作物が栽培できる方策を求められ、前向きな反応があった。施策としては、一步一步進めることになるだろう。意識調査の結果では、「不安」という人の殆どが「安全性」に関してであった。誤解によるところも大きいと思う。正しい情報を提供していくことで、誤解を一つひとつ外していく必要がある。
- ・ 食料政策と農業政策は別物である。日本の食料自給率は39%。今や世界最大のGMO輸入国。それなくして日本人は生きていけない。今までのGMOは食料政策の視点からの輸入であり、その安全性についてのPA活動であった。これからは、自らが開発したGMOを商業栽培するかしないか、いわば農業政策としてのGMO対策を考えねばならない。10年前は、GMOに係わる特許、技術はアメリカに牛耳られていたが、最近の日本の特許は優れている。今は、国内での研究が進んできたことを受けて、生産現場でどう活用するのか、IPハンドリングを前提として、日本的な栽培環境条件の中で農家経営上のメリットは何か、GMOで食料自給率は上がるのか等々の検討を急ぐ必要がある。OKならば自信を持って農業政策として進めるべきである。

- ・同意見である。日本の食料政策や農業政策が決まらないので、基礎研究もまとまらない。政策をしっかりと提示してほしい。
- ・同意見である。政策がないと技術開発のためだけの GMO 研究に見える。日本の食料、農業がどうなるのか、その中でなぜ GMO を開発するのか、位置づけていくべき。輸入が止まったら何もないというのではなく、広い視野で考えられるような情報提供が必要である。
- ・社会に伝わるような努力が必要。
- ・同意見である。農業に夢が持てるような政策を出さないといけない。PA 活動において、日本の科学技術のレベルは高く、将来に夢のある成果が出ていることを科学者がもっと紹介すべきである。科学者への信頼感が高いのではないか。
- ・同様の意見である。アンケートの捉え方であるが、食品添加物でやってもこれと同じような結果が出ると思う。この数字は、国民の理解の状況を知る参考になるものではあっても、今さらここからスタートして一步一步ではないと思う。法律による安全確認はなされ、これに基づき既に食品産業でも使われているのだから、技術開発はもっと前向きに、もっと政策的に出るべきである。
- ・今の日本は、食料は人任せで、それで良いのかという状況である。一人ひとりが気づかなければいけないが、同時に一人ひとりに判断を委ねられても困る。国も人任せでは困る。聞くだけでなく、国はこうする、安全性確保はこうなるというものを示して進むべき。GMO は、花や花粉症緩和米もあるが、飼料とかもっと大きなものでやってもらいたい。
- ・広報活動をやって思うこと。参加した人は良くわかる。信頼度も向上する。でも自分たちでは判断できない。GMO について安全と安心の間に「不信」の問題がある。これまでの努力で不信感は減っているようにも見えるが、部分的に理解しているという意味で、それは安定したものと言えない。何か事件が起これば、一步一步努力して来たものが崩れて状況は一変してしまう。どこに向かっていくのかを国が示し、分かるようにすることが必要。さもないと、環境の変化ですぐに変わってしまう。
- ・コミュニケーションの色々な手法を探している。参考までに秋葉原(東粉協)のイベントのやり方を知りたい。
- ・世界の穀物の需給と価格の観点から、日本が否応なく GMO を受け入れざるを得ない状況が来るのではないか。こう食料を手当てする、こういうやり方をするとということを提示する必要があるのではないか。

しかし危機感がある。それは、よその国では役立つであろうものはあるが、日本にメリットのある GMO が見えて来ないことである。ともかく国内で役に立つものを早く出す必要がある。1 万人のアンケート結果であるが、情報提供した上での 6 割の肯定。反対派から見れば当然の結果と言うだろう。例えば問 9 はメリット中心となっている。GMO のデメリットはそれほど多くはないと思うが、そうだとすると、農薬は減るが種子代が高くなるなどの情報提供が必要。色々な関心に配慮したコミュニケーションが必要である。

- ・ 食料政策としての GMO と農業政策としての GMO は別という観点は大事。しっかり分けて考え、話したい。農業政策は農水省全体でしっかりやる。技術会議では工程表に沿って出来るだけ早く現物を創出する。その間にこつこつコミュニケーションをやっておき、現物をもって国民が選択をすることでないと本物にはならないと思う。
- ・ 各委員から一通り意見が出たが、これらに対して説明があれば。
- ・ 研究開発戦略を取りまとめ、日本でメリットのあるものとして、病虫害抵抗性、飼料作物をターゲットの一つとして位置づけた。これが突破口になると考えている。
- ・ 日本の GMO 開発は国内向けか、海外向けか、世界のマーケットか、世界への貢献か、考え方を整理してかかる必要がある。やはり世界を視野に入れざるを得ない。
- ・ GMO にデメリットはないという意見には基本的に同意。10 年前の議論の段階はクリアーされたと思う。しかし、小規模、少量多品種栽培型農業で、経済的なメリットはあるのか、特許でしばられている GMO が貧農のためになるのか、環境安全の評価は長期的スパンが必要ではないかとの問題が指摘されている。こうした疑問にしていねいに対応する必要がある。リスクコミュニケーションがメリットコミュニケーションにならないよう気をつける必要がある。ISAAA のデータの利用も慎重に考えるべき。またコーンなど輸入作物については、日本がその品種を作るくらいの発想があってもよいのでは。GMO の日本での生産については、経済性の点で隔離の問題がある。閉花受粉、極晩生性、不稔化技術の開発が急務。
- ・ 日本の理科教育、生物教育の問題があって、コミュニケーションがうまくいかないとの分析がある。教育から変えるべきで、その旨の発言をしていく必要がある。
- ・ 今までの努力で、理解が進んできたものと思う。しかし、この努力は継続していくことが必要。

- ・大規模・小規模コミュニケーション会合の結果を受けて、これからの進め方をどのようにしたらよいと考えるのか？
- ・研究開発段階からリスクコミュニケーションの方法で行きたい。
- ・信頼関係を築くことが大切と思う。大規模だけでなく、小規模でも膝詰めのコミュニケーションとしての収穫があった。これを次年度も続けて行きたい。
- ・GMO は国際的な舞台でのせめぎ合いである。日本の研究者、行政担当者もその様な世界を知る必要性がある。
- ・コミュニケーション活動に参加して実感することとして、一般の人々は情報が不足している。GMO についてきちんと聞いたことがない人は未だ沢山いる。一人一人が考えるのは難しい。国や研究者は、しっかり考え方を伝える必要がある。安全対策としての研究開発に一言。閉花受粉や不稔性の研究は大事だが、今あるものが危ないのかという誤解を招かないように注意して説明する必要がある。
- ・リスクコミュニケーションに関しては互いに考えを出すだけでなく、主催者は「少なくとも、この部分は分かってもらう様にしよう」という獲得目標を持って、ここまで理解した、共有化したということで、次に進めるようにしなければならないと思う。コーディネートの方一つでゴールは変わる。
- ・今日は特に結論はこう、という形で締めくくるものでないが、引き続き効果的なコミュニケーション活動を続けてもらいたい。
- ・次年度からは、やり方をさらに工夫する予定、先生方にもご指導を御願いしたい。

バイテクコミュニケーション編集会議の開催

IT等を活用して情報提供活動を効果的に行うため、専門家5名から成るバイテクコミュニケーション編集会議を設置し、当センターは開催事務局として編集会議の運営を担当した。編集会議は3回にわたって開催した。

1. バイテクコミュニケーション編集会議の設置

1) 編集会議の目的

遺伝子組換え技術を中心とするバイオテクノロジーに関し、関係者のニーズと多くの市民の関心に応えられるよう、より正確で適切な情報の収集、評価、提供を行うため、専門家から成る編集会議を設置し、その協力を得て、組織的、効率的に行う。

2) 編集会議の運営

(1) 編集会議メンバーが一堂に会する編集会議は、年3回程度開催することとし、これ以外に、適時メール会議等で協力願う。(6月・10月・1月)

(2) 編集会議のテーマ

第1回：情報提供の方針と骨格、HP・メルマガの内容、情報収集・評価・ライター。

第2回：HP基礎情報部分の更新(案)、読者の反応分析と改善。

第3回：パンフとパワーポイント(案)、読者の反応分析と改善。

3) 編集会議の構成

遺伝子組換え技術をめぐる情報全体を網羅するため、国際基準動向、国内研究情報、海外研究情報、国際貿易情報、リスクアナリシス関係の専門家等により構成する。

国際基準動向情報：林 健一 (OECD/IA 依り規制的監督調和作業グループ 副議長)

海外研究情報：立川雅司 (農林水産政策研究所国際領域上席主任研究官 現 茨城大学農学部地域環境科学科 准教授)

国内研究情報：田部井豊 (独立行政法人 農業生物資源研究所 遺伝子組換え推進室長)

国際貿易情報：緒明 俊 (油糧輸出入協議会 参事 事務局長)

リスクアナリシス：橋本昭栄 (NPO法人 国際生命科学研究機構 部会長)

農水省農林水産技術会議事務局技術安全課担当官
STAFF担当者

2. 編集会議の開催

1) 第1回編集会議の開催

(1) 日 時：平成19年6月25日(月) 14:00～17:00

(2) 場 所：三会堂ビル2階B会議室

(3) 参加者：編集委員、農林水産省担当官、事務局

(4) 検討内容：

ITによる情報提供事業の進め方について

編集会議について

ホームページの管理・更新について

メールマガジンの発行について

パンフレットの作成について

意見交換、個別打合せ

その他

(5) 議事概要：

全体 [基本姿勢]

- ・基本姿勢を、従来の一般の認識向上から、どういう研究開発方向がよいか、日本でのGMOの生産、共存に向けて日本の技術をどういう方向に持って行くかに方向転換をしたはずだが、HP上でもまだ十分に反映されていない。
- ・農水省としても、今年度は一歩前に入るつもりである。研究から具体的な成果を出してもらってリスクコミュニケーションを進めたい。PAを進めるというよりは議論してもらおうつもりである。長期的な視点を持ちたい。

[ターゲット]

- ・全くの初心者と、たとえば地方でレギュレーションをやっている非専門家だが仕事上知識を求めている人、少しわかった人がさらに詳しく調べられる程度の二段階を想定するとよい。

[充実強化すべき内容]

- ・一般向け情報もポジとネガがある。ネガについては昨年のロシアの一件があったが、客観性のある正確な取り扱いと評価が信頼感をあげるために大切である。すぐにコメントできる体制作りが必要であ

る。

- ・新聞等のマスコミにはネグられるような内容でも、重要なことは見えるように情報提供を充実すべきである。

[その他]

- ・科学的発言は、多くのデータに基づいてなされるが、社会的な面からの発言は、十分なデータの裏付けがないまま、あたかも一般的な意見や事実のごとく発言されていることが多い。社会的な事実として客観性があるかどうか要求すべきだ。
- ・掲載方針を明確にすべきである。例えば、ドイツ農務省のサイトはわかってもらいたいという気持ちが読める。

HP各論

[ブログ「にじゅうらせんはうたう」]

- ・当HPに合わないサイトなので廃止する。

[新着情報・講演会情報]

- ・行政当局からの発信は、基本的に新着情報として掲載する。
- ・企業の情報など、得にくい情報も内容を確認して載せていく。

[バイテク図書館]

- ・バイテクExpertは、全体で位置づけなどどのようにするか議論すべき。

[リンク]

- ・国際関係機関も入れた方がよい。OECD、EU、USDAは出にくい。本当に役立つリンクが必要。

印刷物

[バイテク小事典]

- ・今年のコミュニケーション会合とも関連づけて最新版にする。Q&Aも補強する。

[パンフレット類]

- ・Do you know?、Step upは分かり易い。データの更新を中心とする。
- ・パワーポイント資料は更新する。

[メールマガジン]

- ・記事をどの基準で選んでいくか、全体ミーティングで話し合う。

2) 第2回編集会議の開催

(1) 日 時：平成19年12月20日(木) 15:30～19:00

(2) 場 所：三会堂ビル2階B会議室

(3) 参加者：編集委員、農水省担当官、事務局

(4) 検討内容：

パンフレットの改訂について
バイテク小事典改訂について
講義用資料の改訂について
ホームページの管理・更新について
メールマガジンの発行等について
意見交換、個別打合せ
その他

(5) 議事概要

全体

- ・事務局からの提案に基づいて、パンフレット類、小事典、パワーポイント資料の具体的な討議した。改訂作業に当たっては各委員から分担協力も得て仕上げを行う。
- ・農水省では、各種広報制作物について省のイメージや信頼感の向上に資することを目的に統ルール化を進めている。各種広報制作物に「農林水産省」と記載し、農水省から国民全体への提供物としてふさわしいかの視点で内容を確認する。

具体的な内容：

[パンフレット]

- ・「知ってトクする！食べ物まめ知識」、「Do You Know」、「Step up」の具体的な改訂内容について意見交換を行った。

[バイテク小事典]

- ・データの更新と、ホームページで改訂して来た内容を中心に改訂を行う。
- ・協力メンバーとして編集会議参加専門家を編集者として明記する。

[講義用資料]

- ・本年の活動の中で、情報を集め改訂する。

[ホームページ]

- ・ホームページの管理運営を適切にするために8月にサーバーを変更した。
- ・トップページに「お知らせ表示コーナー」と、「大規模、小規模、連携各コミュニケーション活動」の内容にアクセスできるように変更を加えた。
- ・アクセスログの正確な把握・解析と、ホームページの適切な管理のために必要なソフトウェア (Site Tracker) を導入する。

[メールニュースの発行等]

- ・体裁を大幅に変更して、月3回の発行を継続。
- ・読者数の拡大を検討。

[海外情報]

- ・海外情報源として *Environ. Biosafety Res.* も採用。

3) 第3回編集会議の開催

(1) 日 時：平成20年3月4日(火) 15:00~19:00

(2) 場 所：三会堂ビル2階B会議室

(3) 参加者：編集委員、農水省担当官、事務局

(4) 検討内容

パンフレット類の改訂について

バイテク小事典の改訂について

講義用資料の改訂について

ホームページの管理・更新について

メールマガジンの発行等について

意見交換、個別打合せ

その他

(5) 議事概要

全体

- ・パンフレット類、小事典、講義用資料の具体的な改訂作業を進めた結果を成果品案の形で提示し、最終チェックを行った。なお、今回の改訂では、農林水産省のロゴを入れて同省の発行であることを明確にした。
 - ・パンフレット類は新データを使い、見やすさ、理解しやすさを重点に大きく改訂した。
 - ・特に、小事典は既にホームページで改訂された内容を反映したものとしたが、表紙デザインも一新し、ページ数がほぼ2倍となって大幅な改訂となった。
- 具体的な意見等：
- ・パンフレット類は、全体に良くできているとの評価であった。具体的な表現、数値等の一部に付き指摘や意見があったので、修正することとした。
 - ・バイテク小事典は、最新用語をさらに幾つか入れることとした。
 - ・講義用資料は、今年度、連携コミュニケーションで使った講義資料を基に仕上げることにした。
 - ・ホームページ、メールニュースに関しては、最近の動きを報告。

ホームページ「バイテクコミュニケーションハウス」の提供

ホームページ「バイテクコミュニケーションハウス」を開設、運営し、遺伝子組換え技術を中心としたバイオテクノロジーに関する情報を、広く国民に対してわかりやすく提供、説明した。

1. 実施状況

1) ホームページの内容

(1) 新着情報

- ・バイオテクノロジー関連の研究開発、企業、行政、海外等の最新情報を181件提供。(平成19年4月～20年2月まで)

(2) 講演会のご案内

- ・一般市民が参加し易い全国各地の講演会・イベント情報を39件掲載。(平成19年4月～20年2月まで)

(3) バイテク図書館

- ・基礎編パンフ「知って得する！食べものまめ知識」
- ・初級編パンフ「Do you know? - 遺伝子組換え農作物入門プログラム」
- ・中級編パンフ「遺伝子組換え農作物」を知るために ステップアップ編
- ・動画配信「DNA抽出実験」
- ・「バイテクEXPERT」研究開発・文献等専門的な内容を28件掲載。(平成19年4月～20年2月まで)

(4) リンク

- ・バイオテクノロジー、遺伝子組換えに関連するサイトを4分野に分けて掲載。

(行政機関：企業関連：研究機関：各種機関)

(5) バイテク用語集

- ・バイオテクノロジーに関する用語193語を分かり易く説明。

(6) ご意見募集<平成18年度から開設>

- ・閲覧者が意見等を直接ホームページ管理者に送信できる欄

(7) バイテクQ&A集

- ・基本的な質問に対する回答集として、随時、増補して掲載。

(8) 掲示板

- ・閲覧者の書き込みによって、閲覧者間のコミュニケーションがとれる場。

(9) メールニュース

- ・メールニュースのバックナンバーを26件掲載。(平成19年4月～20年2月まで)

(10) 企画会議<平成18年度から開設>

- ・バイテクコミュニケーション企画会議の内容・活動状況を掲載。

(11) 大規模コミュニケーション会合、小規模コミュニケーション会合、連携コミュニケーション<19年度新設>

- ・上記会合の内容・活動状況を掲載。

(12) お知らせ表示コーナー<19年度新設>

- ・重要な情報、タイムリーな情報提供のために新設。

2) 19年度における主な改善点

- (1) 大規模コミュニケーション会合、小規模コミュニケーション会合、連携コミュニケーションのコーナーを新設し、同上会合の資料や会議の概要を公表。

- (2) 重要な情報、タイムリーな情報提供のために、「お知らせ表示コーナー」を新設した。

- (3) 情報の充実：一般市民から専門的情報を必要とする方々まで広い範囲の需要に対応できるように、遺伝子関係、組換え農作物関係に限らず関連する分野の情報の掲載も行った。また、研究開発や文献等の専門的情報は、「バイテク図書館」内の「バイテクEXPERT」に入れて閲覧しやすくなるように継続した。

- (4) ホームページの管理運営を適切にするために8月にサーバーを変更した。

- (5) アクセスログの正確な把握・解析と、ホームページの適切な管理のために必要なソフトウェア(Site Tracker)を1月末に導入した。

- (6) 18年度の運用実績から、ブログ「にじゅうらせんはうたう」は、当ホームページには合わないサイトであることが判明したので廃止した。

2. アクセス数

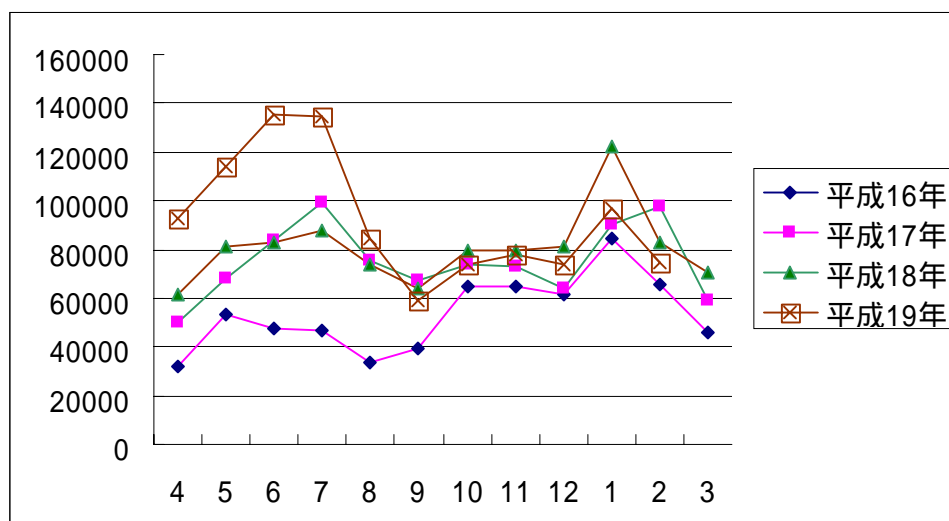
- (1) 現行のソフトを用いた解析では、平成19年4月から平成20年2月までの総アクセス数は、1,018,051件となり、月平均92,550件となった。昨年度平均8万件に較べ増加した。(図参照)

(2) より正確にアクセスログを把握・解析し、ホームページを適切に管理するために、ソフトウェア Site Tracker を1月末に導入し稼働、解析を開始した。

ホームページ「バイテクコミュニケーションハウス」



年度別月別アクセス数



メールマガジン「バイテクハウス Mail News」の発行

メールマガジン「バイテクハウス Mail News」を定期的に発行して、遺伝子組換え技術を中心としたバイオテクノロジーに関する情報を、提供した。

1. 内容と配信

- (1) 平均して月3回程度のペースで、登録者に配信するとともに、ホームページ「バイテクコミュニケーションハウス」にも、その内容を掲載した。(平成19年7月から本格開始して20年2月まで26件)
- (2) メールマガジンの内容は、簡潔で見やすくするためにデザイン等を変更し、バイテク関係のものを出来るだけ広く含めて、最新情報、講演会情報を中心に配信した。

2. 配信読者数

- (1) 読者を増やすために、前掲のホームページ掲載に併せて閲覧者への登録勧誘と併せて、PRチラシを各種のコミュニケーション会合、行事・会議・イベント時に、参加者・出席者に対し、配布と勧誘を行った。
- (2) パンフレット類、DNAストラップ配布を希望した高校、大学、団体の担当教諭、担当教官、担当者に対する勧誘と、関係者へのPRチラシ配布依頼を行った。
- (3) 2007年3月で1115名だった配信者数は、2008年3月で1176名。(5%増加)

内外情報の収集・整理と遺伝子組換え技術等に関するパンフレットの改訂

遺伝子組換え技術を中心としたバイオテクノロジーに関する情報を、広く国民に対してわかりやすく提供、説明するために、編集会議の専門家などの協力を得て、内外情報の収集・整理、パンフレット類の改訂、バイテク小事典の改訂、講義用資料の改訂を行った。

1. 内外情報の収集・整理

内外情報の収集・整理は、STAFF担当者が毎日行っているが、編集会議の専門家にも依頼して、主として海外の専門技術情報、海外のGMOを巡るニュースなどの情報を収集し、整理してホームページへの掲載、メールニュースでの配信を行った。

2. パンフレット類の改訂

具体的な内容としては、パンフレット類は新しいデータを付け加えると共に、見やすさ、理解しやすさを重点に大きく改訂した。また、農林水産省のロゴを入れて、同省が発行するものであることを明確にした。

1) 基礎編パンフ「知って得する！食べものまめ知識」

改善点：農水省ロゴ、文章の正しい表記、見やすくするために色調整。

2) 初級編パンフ「Do you know? - 遺伝子組換え農作物入門プログラム」

改善点：農水省ロゴを入れ、統計データの更新をした。Lesson4「遺伝子組換え農作物の可能性」の内容を「遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会」の最終取りまとめに沿って内容に書き換えた。見やすさ、理解しやすさの点から全体を見直し、レイアウト、色調整を大幅に行った。

3) 中級編パンフ「遺伝子組換え農作物を知るために - ステップアップ編」

改善点：農水省のロゴを入れ、統計データの更新をした。記載の文章内容について、企業色の排除、よりわかりやすくすること・正確さを基準に幾つかの点を書き換えた。

3. バイテク小事典の改訂

改善点：農水省のロゴを入れ、統計データの更新をした。バイテクQ&A集については、昨年度ホームページで改訂した内容と合わせ、掲載項目は大幅に増え、内容にもかなり手を加えた。バイテク

用語集については、基本的に今までの内容を踏襲するが、最近の技術の進歩に合わせて記述を改訂するとともに新用語を取り入れた。これらの結果総ページ数は約2倍程度的大幅改訂と増補となった。

4. 講義用資料の改訂

改善点：「バイオテクノロジーの基礎」と、「遺伝子組換え食品とその安全性」が既にあるが、今年度、連携コミュニケーションで使った同じ表題の内容に基本的に改めた。また、同じく連携コミュニケーションにおいて初心者用に「DNAって何だろう？」を使って説明したところ好評を得たので、これを新たに教材に加えた。



各6千部作成 展示会・講演会や要請を受けて配布

まとめ

1 バイテクコミュニケーション企画会議の開催

有識者12名で構成する「バイテクコミュニケーション企画会議」を3回開催し、コミュニケーションの進め方等について助言をいただいた。会議は、公開で行い、会議資料や議事概要は、ホームページで公表した。

今後は、単に一般的な助言を得るだけでなく、コミュニケーション手法の分析等、コミュニケーションの進め方の方針について助言を得る等、運営を改善する必要があると考える。

2 バイテクコミュニケーション編集会議の開催

遺伝子組換え技術を中心とするバイオテクノロジーに関し、関係者のニーズと多くの市民の関心に応えられるよう、より正確で適切な情報の収集、評価、提供に行うため、新しい試みとして、5名の専門家からなる編集会議を設置し、その協力を得て、組織的、効率的に行った。

その結果、特に、情報の収集や各種パンフレットの改訂等を的確に行うことができた。今後は、さらにこの機能を充実強化して、コミュニケーションをより一層効果的に進める必要があると考える。

3 ホームページ「バイテクコミュニケーションハウス」の開設・運営

今年度においては、大規模コミュニケーション会合、小規模コミュニケーション会合、連携コミュニケーションのコーナーの新設、重要な情報、タイムリーな情報提供のための「お知らせ表示コーナー」の新設等の改善を行った。

その結果、現行のソフトを用いた解析では、平成19年4月～平成20年2月までの総アクセス件数は、1,018,051件、月平均アクセス件数は、92,550件となり、昨年度の月平均8万件に比べ増加した。

また、より正確にアクセスログを把握・解析し、ホームページを適切に管理するために、ソフトウェア Site Tracker を1月末に導入し稼働、解析を開始した。

アクセス件数がさらに増加するよう、より利用し易く改善することが今後の課題である。

4 メールマガジン「バイテクハウス Mail News」の発行

メールマガジン「バイテクハウス Mail News」については、月平均3回程度のペースで、登録者に配信するとともに、ホームページ「バイテクコミュニケーションハウス」にも、その内容を掲載した。また、簡潔で見や

すくするためにデザイン等を変更し、バイテク関係のものを出来るだけ広く含めて、最新情報、講演会情報を中心に配信した。また、各種のコミュニケーション会合、行事・会議・イベントの開催時、及びパンフレット類、DNAストラップの配布を希望した高校、大学、団体に対して、メールニュースへの配信登録の勧誘を行った。

その結果、2007年3月で1115名だった配信者数は、2008年3月時点で、1176名と5%増加した。今後は、さらに、内容を充実する等により、一層の読者拡大に努めたい。

- 5 内外情報の収集・整理と遺伝子組換え技術等に関するパンフレットの改訂
各種パンフレット類については、編集会議の助言を得て、新しいデータを付け加えると共に、見やすさ、理解しやすさを重点に大きく改訂した。また、農林水産省のロゴを入れて、同省が発行するものであることを明確にした。

特に、初級編パンフ「Do you know? - 遺伝子組換え農作物入門プログラム」については、「遺伝子組換え農作物の可能性」の内容を「遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会」の最終取りまとめに沿った内容に書き換えた。また、バイテク小事典については、前回の改訂時点（平成16年3月）以降の新しい状況を踏まえて、バイテクQ&A集の掲載項目を大幅に増やすとともに、内容にもかなり手を加える等の大幅見直しを行った。これらの結果、総ページ数は約2倍程度の大幅改訂となった。

今年度の、実施結果を踏まえ、今後のコミュニケーションの一層の推進を期待している。

参考資料

1. バイテクコミュニケーション企画会議

1 - 1. 第1回バイテクコミュニケーション企画会議

1 - 1 - 1 プレスリリース

1 - 1 - 2 会議次第

1 - 1 - 3 配付資料1：バイテクコミュニケーション企画会議の開催について

1 - 1 - 4 配付資料2：バイテクコミュニケーションの進め方

1 - 1 - 5 配付資料3：「遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会」の中間取りまとめの概要

1 - 1 - 6 配付資料4：遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方（中間とりまとめ）

1 - 1 - 7 配付資料5：「遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会」中間取りまとめ

1 - 1 - 8 配付資料6：遺伝子組換え農作物(GMO)をとりまく現状

1 - 1 - 9 配付資料7：遺伝子組換え用語集

1 - 1 - 10 配付資料8：遺伝子組換えの安全性をめぐる主な議論

1 - 1 - 11 会議概要

1 - 1 - 12 速記録

1 - 1 - 13 写真

1 - 2. 第2回バイテクコミュニケーション企画会議

1 - 2 - 1 プレスリリース

1 - 2 - 2 会議次第

1 - 2 - 3 配付資料1：「遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会」の最終取りまとめの概要

1 - 2 - 4 配付資料2：遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方（最終とりまとめ）

1 - 2 - 5 配付資料3：「遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会」最終取りまとめ

1 - 2 - 6 配付資料4：平成19年度遺伝子組換えに関するコミュニケーション活動の概況

1 - 2 - 7 会議概要

1 - 2 - 8 速記録

1 - 2 - 9 写真

- 1 - 3 . 第 3 回 バイテク コミュニケーション 企画 会議
- 1 - 3 - 1 プレス リリース
- 1 - 3 - 2 会議 次第
- 1 - 3 - 3 配付 資料 1 : バイテク コミュニケーション 活動 推進 事業 実施 報
(概要)
- 1 - 3 - 4 配付 資料 2 : バイテク コミュニケーション 基盤 事業 実施 報告
(概要)
- 1 - 3 - 5 配付 資料 3 : 遺伝子 組換え 農作物 等 に関する 意識 調査 集計 結果
(調査 モニター)
- 1 - 3 - 6 配付 資料 4 : 遺伝子 組換え 農作物 等 に関する 意識 調査 集計 結果
(イベント 参加者)
- 1 - 3 - 7 参考 資料 1 : 「 遺伝子 組換え 農作物 等 の 研究 開発 の 進め 方 に関する
検討 会 」 最終 取り まとめ (資料)
- 1 - 3 - 8 参考 資料 2 : 遺伝子 組換え 農作物 に関する 第 2 回 コミュニケー
ション (資料)
- 1 - 3 - 9 会議 概要
- 1 - 3 - 10 速 記録
- 1 - 3 - 11 写真

2 . 編集 会議

- 2 - 1 . 編集 会議
- 2 - 1 - 1 : 第 1 回 編集 会議 要領
- 2 - 1 - 2 : 第 1 回 編集 会議 議事 メモ
- 2 - 1 - 3 : 第 2 回 編集 会議 要領
- 2 - 1 - 4 : 第 2 回 編集 会議 議事 メモ
- 2 - 1 - 5 : 第 3 回 編集 会議 要領
- 2 - 1 - 6 : 第 3 回 編集 会議 議事 メモ

- 2 - 2 . パンフレット 類
- 2 - 2 - 1 : 食べ も の まめ 知識
- 2 - 2 - 2 : Do you know? 遺伝子 組換え 農作物 入門 プログラム
- 2 - 2 - 3 : Step up 遺伝子 組換え 農作物 を 知る ため に

- 2 - 3 . バイテク 小事 典
- 2 - 3 - 1 : バイテク 小事 典

2 - 4 . 講義用資料

2 - 4 - 1 : DNA って何だろう？

2 - 4 - 2 : バイオテクノロジーの基礎

2 - 4 - 3 : 遺伝子組換え作物・食品を取り巻く状況